

中井町らしい田園風景を生かした交流のシンボル —「地塁」「地割」形状の段々屋根と段々広間



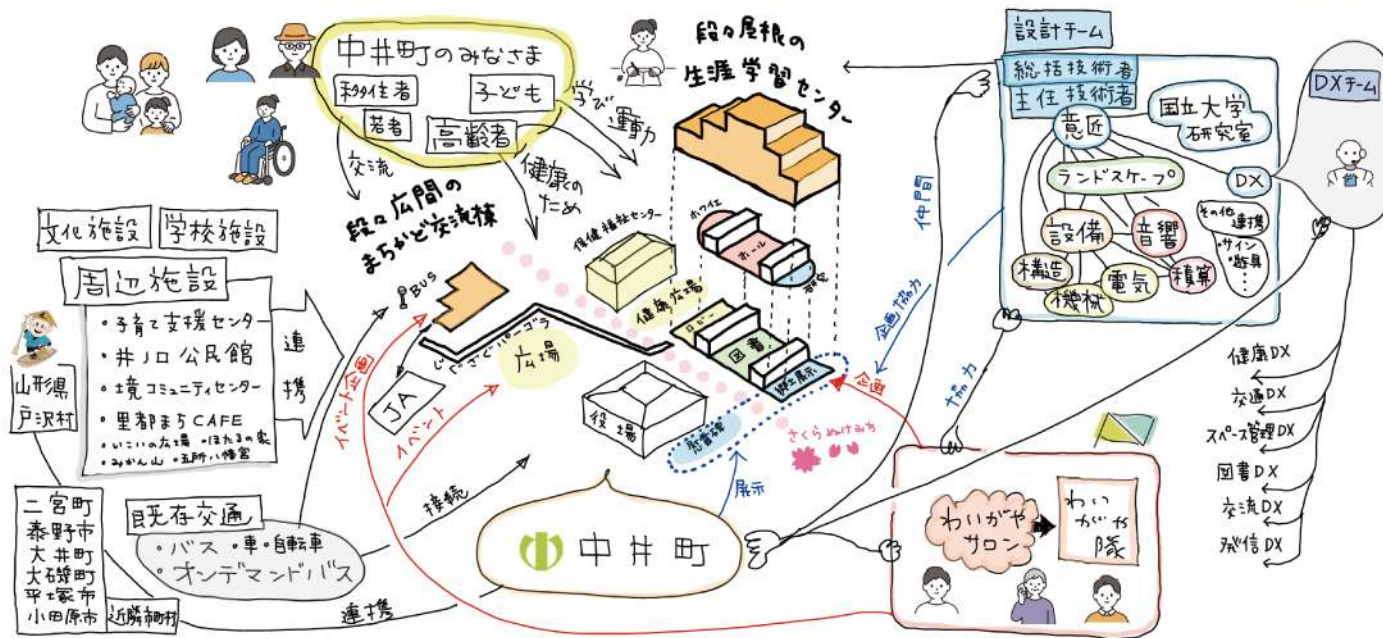
比奈窪56エリア全域を学びと交流の場とする 中井町生涯学習センター

— これからの公共建築群の「コネクタブル・グランドレベル」のありかたをめざして

関係人口の創出

場所の関わりが人の関わりを生む。比奈窪56エリアの建物群が互に関係し合うと、それぞれの施設の関係者どうしが関わる時間が増加します。さらにこの空間と連携する周辺施設（井ノ口公民館や境コミュニティセンター等）や近隣地域（二宮町、秦野市等）が増えると、交通インフラがより活性化します。そうした良い循環の先に移住者や若者の増加、高齢者と子どもの触れ合いが増加していくことが期待されます。

本計画ではエリアの施設群が地上で開放的に連続する「コネクタブル・グランドレベル」を提案しています。エリアの各場所の特性を踏まえた接続と、既存の散歩ルートや水路や桜の軸を考慮した平面計画です。



中井町には断層の影響で隆起した「地塁」と呼ばれる凸状の地形をもちます。同時に豊かな農村風景がつくる田畑の「地割」による段々平面形状はこの地の愛される分かりやすいシンボルとしてふさわしい形だと考えました。



立面図——比奈窪56エリアを東側より見る。グランドレベルの抜けが、風景を連続させていきます。

私たちが大切にしたいこと

「中井町らしいみんなの生涯学習センターへ」



歴史・文化 町民の声 基本構想
これまで積み重ねてきた検討を大切にします



地塁 (凸状の地形)
地割 (田畑の風景)
中井町らしいシンボルの創出へ

提案 みんなのシンボル「段々屋根 段々広間」



日常に溶け込む施設を提案します

企画提案

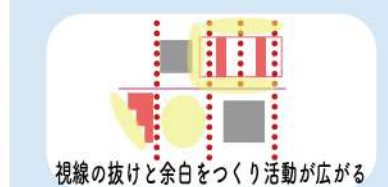
i. 比奈窪56エリアを踏まえた土地利用計画
共助を育てる多方向アクセス

ii. 2030年代を見据えた未来の公共建築
みんなのセカンド・サードプレイス

iii. を実現するため中井町にどのように寄り添うか
みんなで愛着のもてる施設

技術提案

「コネクタブル・グランドレベル」



● 未来の活動を許容する余白ある場づくり
● 活動が地域を超えて循環・交流する平面計画と共助の仕組みづくり

（繋）×（交）

エリア全体を巡り、
繋がり交わり憩う

「日常の場を学習・運動・防災の場にするエリア全体の学習機能配置」

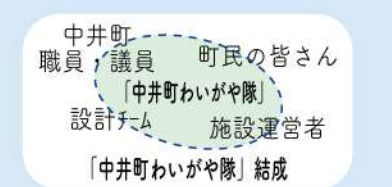


● いつもの通り道からふらっと立ち寄り
● 日常の学習・健康づくり・DX推進の場
● 非日常の祝祭の場（本格劇場ホール）

（集）×（憩）

日常生活に溶け込み
いつもの場所が交流・防災拠点に

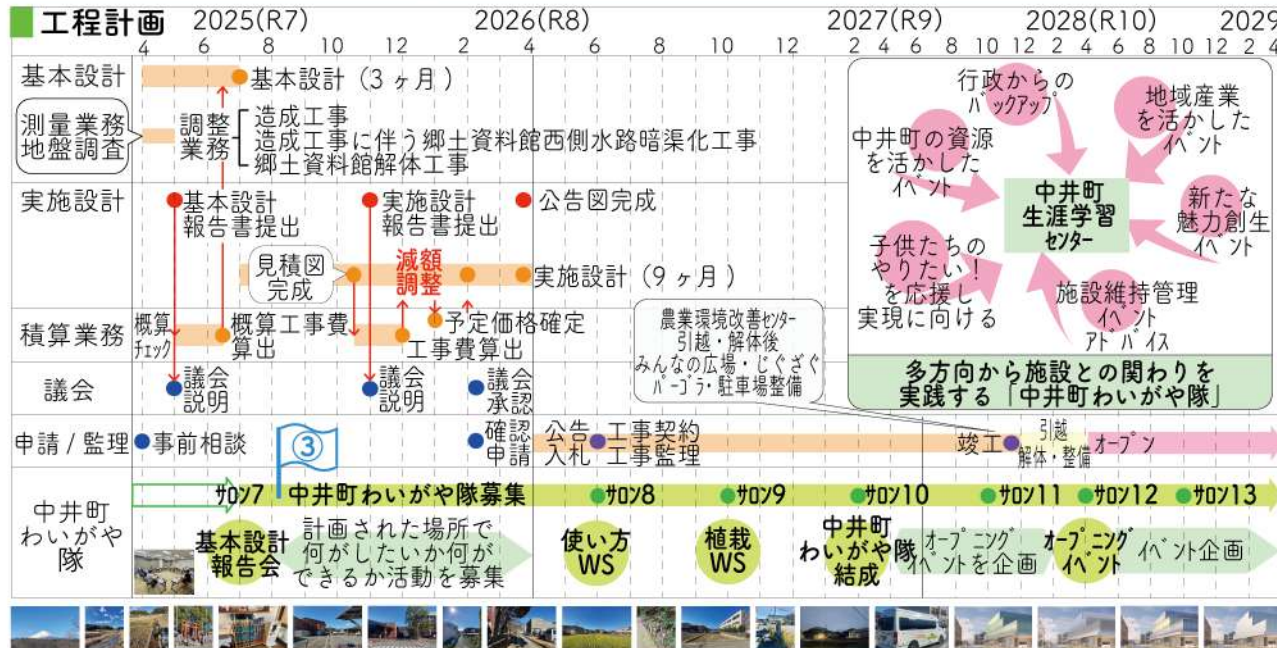
「2棟配置が作りだすみんなのイベント基地」



● バス待合（交通拠点）を「中井町わいがや隊」イベント基地とし、活動が地域のの人に伝わりやすい掲示を行う

（学）×（教）

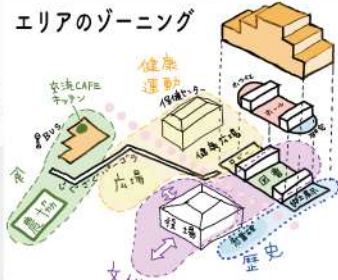
エリア全体が「グランドレベル」で繋がれ、
みんなの学び・遊びが見える



食・健康・文化・歴史の活動の連携 (繋) × (交) (集) × (憩) (学) × (教)

周辺施設との連携を考慮した配置計画はさまざまな活動を生み出します。これらの機能が満たされることにより、生み出される付加価値・付加機能とは、中井町愛であり、地域での子育てしやすさ・町の社会資本を町民へ繋げる循環だと考えます。

エリアのゾーニング



中井町愛を育てる場

故郷を愛する事は故郷を知る事から始まります。多世代の人々が日常的に訪れるこの場所では、中井町の自然や歴史を気軽に感じることができると同時に、より知識を深めることができます。個々の興味が町の財産となり、次世代へ繋げる要となります。

地域みんなで子育て

安心して子供だけでも訪れることができるこの施設では、多方面からの視線抜けにより施設に訪れる人から働いている人まで、子供を見守る事ができます。バス待合所や里都まち交流ロビーでは、オンデマンドバスとの連携を取り、帰宅までの安全を地域全体で見守ります。

循環するまちづくりの起点

生涯学習とは人が生涯にわたり学び・学習意欲を持ち続ける事です。日常の体験や人々との交流が日々の知見と意欲を高めていきます。この施設では、生涯学習を通して共助精神を高め、周辺地域の関係を強化させ人や物や知識が循環するまちづくりの起点としての機能を目指します。

食 [農協／交流カフェ・キッチン]
健康 [保険福祉センター／健康広場]
文化 [町役場／生涯学習センター]
歴史 [慰霊碑／郷土資料展示]



交通と交流の拠点

「バス待合所」や町民がイベントを行うアトリや和室等が入る「まちかど交流棟」は雁行した平面形状で自然とみんなが集まりやすい滞留の場をつくりまします。トイレは施設が閉まっても屋外から使用できます。



役場の活動も溢れ出す

役場正面入口の横に新たな通り抜けの道を整備し、その正面に生涯学習センターの「里都まち交流ロビー」を配置します。日常動線が役場の周りにあることで、活動が溢れ出し、みんなのセカンド・サードプレイスとなります。



ランドスケープの活動プログラム

親水エリア：中井町の美しい水に触れられる場とし、窪地の芝生広場では近い距離で清流に親しむことができます。
遊具：子供達や子育て世代が親しめる場と、屋外空間、公園と連携して中井町のレクリエーション機能を高めます。
さくらぬけみち：散策路の一部となり、休憩スポットとして機能します。緑や水路の植物・生き物も楽しめる小道です。

【生涯学習センター棟】	2724㎡
【まちかど交流棟】	300㎡
計	3024㎡
交流機能	255㎡
多目的ホール機能	760㎡
図書館機能	490㎡
学習機能	518㎡
郷土資料館機能	388㎡
連携融合機能	613㎡

町民の健康促進・交流促進と DX

保健福祉センター1階の未病センター・なかい健康づくりステーションと連携し、生涯学習センター北側に健康遊具を配備した「健康広場」をつくりまします。隣接する「里都まち交流ロビー（生涯学習センター・メインエントランス）」には個人のスマホと連携できる健康測定機器カウンターを設け、高齢者の DX 学習に生かします。ロビーには近隣・交流市町村（大磯町、平塚市、山形県戸沢村）との取り組みを検索できるモニター設置を提案します。ロビーは多目的ホールへの動線となり、高天井空間からロフトを経由したアプローチは劇・音楽イベント時の非日常空間への導入を演出します。



のびやかな田園風景が広場、富士の風景へと連続

駐車場が整備される東ゾーンには豊かな田園風景がひろがり、段々屋根のシボル性を最も感じ取れます。「健康広場」を介して、農業環境改善センター跡地の広場へ、そこから望む富士山の風景へと自然の抜けが繋がります。



学習・交流・活動の溢れ出し

役場の東に整備される緑豊かな「さくらぬけみち」には、生涯学習センターの活動が溢れ出し、空間の抜けが北側まで広がります。生涯学習センターの地盤レベルは町役場と合わせ、バリアフリーで行き来が容易な高さとしまします。



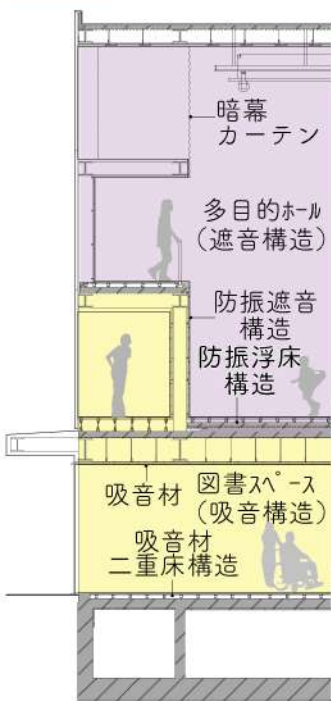
2棟配置・運用 エリア全域にひろがる学習と交流

まちかど交流棟

エリア全域を学習・交流の場とすべく町民が自主的にイベントを企画できる場所を分棟で設け、独立した開館（スマートロック）を可能とします。バス待合所と兼ねることで日常的な交流を促します。みんなの広場側のトイレは屋外から使用可能とし、中井町にある散策コースの立ち寄り場所としても機能します。構造は木造で親しみやすい印象をつくります。

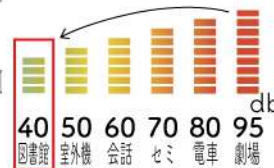


音響防振 用途に応じた快適空間をつくる音と防振の計画



音響 図書スペースはNC-35（40dB）で計画します。多目的ホールでの発生音量を95dBと過程した場合の必要遮音量95-40=55dBに加え、低音域の遮音量、施工精度を考慮した音響防振計画を行います。

多目的ホール
概算室諸元
室容積V=4500m³
室総表面積S=1750m²
V/S=2.57m
N=414席
V/N=10.8m³/N
最適残響時間1.1秒～1.3秒



生涯学習センター棟

左右対称の明確なゾーン分けは運営を容易にし、目的に応じて選べる様々なタイプの学習の場を館内・屋外に点在させます。日常的に利用頻度の高い図書館を1階に計画し、東西への視線と動線の抜けを設ける事で、より身近な図書スペースが実現できます。多目的ホールは災害時の近隣住民の避難場所として利用します。アクセスが容易な行き止まりのない平面計画とします。

←：視線の抜け
生涯学習センター棟平面図
S=1/1000

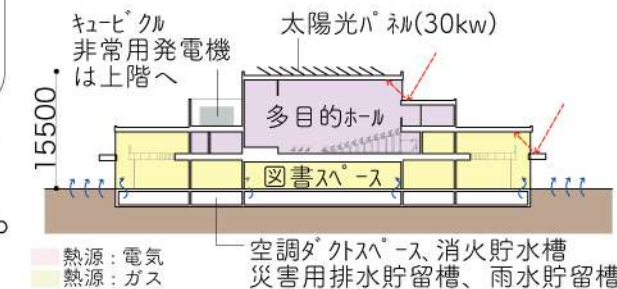


設備防災省エネ 日常的に使う事が備えに繋がる防災設備計画

熱源 日常稼働の図書スペース等を電気熱源、予約利用される多目的スペースをガス熱源と二元化し、電力ピークカットを行い経済的運用かつ、災害時に配慮します。運用段階に低コスト・短期間で修繕・更新ができるよう、各室は空冷ヒートポンプパッケージエアコンとします。

省エネ 建物は省エネにより一次エネルギー消費量削減率50%以上を実現したZEB Ready以上を目指します。

防災 生涯学習センター棟の地盤レベルは町役場と合わせて嵩上げし水害に備えるとともに、バリアフリーで行き来を容易にします。2階多目的ホールは災害時の近隣住民の一時避難場所となるよう、全方位からアクセス可能な動線計画とします。ピットは災害用排水貯留槽、ダクトスペース、また、雨水貯留槽として利用し災害時のトイレの排水などに利用できると共に、夏場に散水利用し周辺温度を下げます。



DX推進 集うことが健康・学習・交流・DXに繋がる

2025～2030 DX推進のスタートダッシュ

①DXに慣れ親しむ場づくり…交流スペースに健康測定カウンター、施設やイベントのオンライン予約システム、バスロケーション表示が集まり、暮らしの一部をDXで支えます。受付カウンターと近接し、不慣れな方も安心して利用できます。

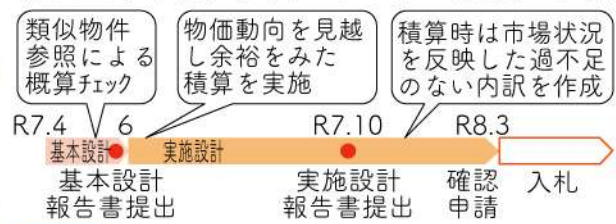
②2棟配置を支えるDX…スマートロック等のデジタル技術で2棟配置の管理を容易にし、エリアを超えた活動や情報の連携を支えます。

2030～ 新たなDXの未来へ
無柱の図書館など使い方を限定しない空間づくりがデジタル技術と融合した新たな施設のあり方を受け入れます。設備の増設・更新にフレキシブルに対応可能な仕様とします。

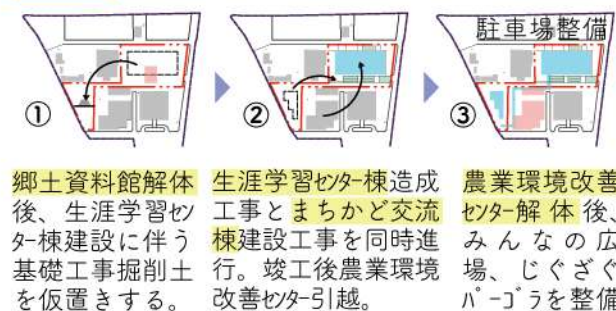


コスト・土量 きめ細かなコスト管理の徹底

建設費高騰・労務費上昇の現在、設計段階からコスト管理を行う必要があります。比奈窪 56エリア全体の土量計画（搬出土削減）を行い、建設費以外に必要な家具・備品・サイン計画・システム構築といった調整事項も念頭においた上で、初期段階から発注者と協議を重ね、手戻りや滞りのない計画を実現します。



施工計画 比奈窪 56 エリア全域で検討する施工計画



無柱図書館 学習・交流活動がエリア全域に溢れ出す

①集い学ぶ

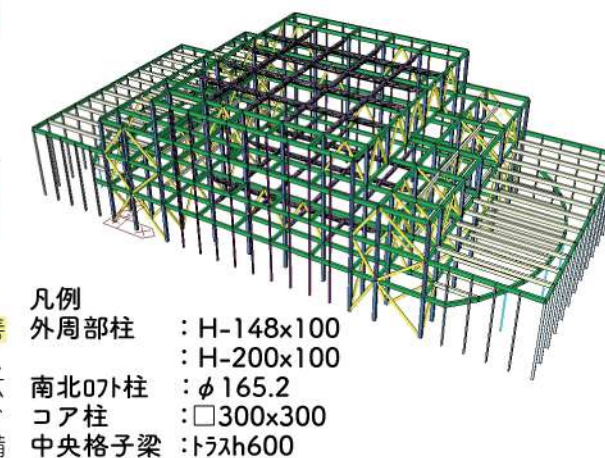
かつて中井町で盛んだった念仏講・富士講などの学びのコミュニティの仕組みを参照し、町民が比奈窪 56エリアに集い滞在し、通り抜けることで学びと交流が起きる空間を目指します。東西の開放的な抜けのある無柱の図書館は未来の変化を受け入れ、また、外へ学びの場を広げます。

②未来の変化を受け入れる
ペリメータゾーン（飲食可ゾーン）より内側の無柱空間は、未来に向けた本棚レイアウトが自由な計画とします。また、様々なタイプの学習スペースを用意し、子どもの成長に応じて、またその日の気分に応じて場所を選べる図書館です。

③わくわくするテーマ配架の学び
図書館に行くのが楽しくなる、興味を誘うテーマ配架がしやすい平面計画です。

構造計画 整形・対称平面とコア格子梁による無柱空間

本計画は3階建（構造的には鉄骨4層）の建物です。建物中央に21m×20mの無柱空間があり、その両サイドに耐震コアを有した、整形で耐震的にバランスの良い平面計画です。耐震コアで水平力を処理することで、外周柱を細くし、開放感のある外観を実現しています。ほぼ正方形の無柱空間は格子梁で構成され、荷重を分散させることで部材断面を抑えています。また、鉄骨造による軽量化は敷地の地盤特性（杭が必要）にも配慮された計画です。東西に抜けと広がりをつくります。



多目的ホール 本格的劇場利用から日常運動利用まで対応

町民が待ち望む劇場ホールは本格設備環境を整え、2階に浮遊するホールへのアプローチは非日常的な祝祭性を演出します。体育館時はバウンス窓から光が降り注ぎ、町民の健康維持に寄与します。音響・防振専門家を設計チームに含み、階下への影響に配慮します。日常開放されるホールでのイベント予約はDX化し情報が携帯に届きます。移動座席・暗幕を備え音楽・演劇・講演・成人式等イベントが可能です。

郷土資料 日常的に立ち寄る郷土の歴史ゾーン

慰霊碑のある比奈窪 56エリア南側を歴史学習ゾーンと位置づけ、日常的に立ち寄りやすい展示・研究空間をつくります。ふらっと学習・通り抜けを促します。



ランドスケープ 既存の生態系と水田のグリッド・ネットワーク

幅広い世代・多様な活動の受け皿となるオープンスペースを目指します。芝生広場を窪地とし、かつてこの土地が水田であった頃の水路を活かし、親水空間を創出します。ゆるやかに地形を操作し、日常・非日常の両方のシーンで多世代が利用しやすい屋外空間を創出します。芝生広場ではより一体感のある空間を確保すると同時に親水エリアをつくります。バウンスガーデンでは水田に見られる草本植物を主体とした植栽を行い、周辺の生態系のネットワークを形成することを目指します。また、広場の樹木は周囲の山々に自生する樹種（クヌギ・コナラ群集）を中心に植栽し、紅葉や花の時期と呼応する景観を楽しめます。

